羽陽学園短期大学紀要　第10巻　第２号（通巻36号）2016年２月
Bull. of Uyo Gakuen College, Vol.10, No.2, February 2016

絵本のイメージとピアノ即興表現（その１）

－豊かな表現力・感性を育むために－

和田朝美　幼児教育科　非常勤講師
米澤美紀　幼児教育科　非常勤講師
佐藤　映　幼児教育科　非常勤講師

（2015年10月１日受理）

〔　要　　約　〕

絵本を用いた即興表現は、幼児教育者を目指す学生にとって必修の学習と考える。絵本の即興表現は「見る事」「読む事」「楽器に触れる事」「動く事」「聴く事」それぞれの感性が調和し融合して育まれるからである。本研究では以上の事を仮説と踏まえ、本学の音楽基礎Ｂ（器楽）、子どもと音楽Ｂ（器楽）受講の学生に対して筆者たちはeducatorとして関わり、実践的研究を行ったものである。その結果学生たちは絵本を用いたピアノ表現に心の解放を見出し、「見る」「読む」「ピアノに触れる」「聴く」事にさらに学生の今までの経験を融合し、豊かな感性や表現力を導き出すことに効果があった。

Ⅰ．はじめに

本学では幼児教育の教員養成校として、実習、採用試験、保育の現場において必要とされるピアノを弾く力を養成している。入学者の半数以上がピアノ学習初心者であり、なかにはピアノに触れたことがない学生や、読譜や演奏にストレスを感じている学生も多く見受けられる。２年間の授業と毎日の個人練習の積み重ねを怠らなければ、初心者でも現場で対応できる力を身につけることはできるが、それには相応の覚悟と強い意志が求められ、授業にも工夫が必要となってくる。

さらに楽譜を難なく読め、指が左右自在に動かすことができるだけでは、保育現場での活動が充実したものになるとは限らない。音楽の表情が豊かで、子どもたちに伝わる表現力は伴っているのか、音楽に対する感性やイメージを持ち合わせているのか、実際の保育現場では、これらのことが必要とされているのではないだろうか。

幼児にとっては、「正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」[1)]が大切である。教師自身も音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わう経験と視点の広がりを持たなければ、子どもたちの音楽活動も貧弱になりかねない。さらに子どもたちの多様な表現活動を読み取る力も不足するであろうし、音楽の面白さは伝えられないとも言える。

音というものは見えないものであるが、表現力の高い充実した音楽になればなるほど、音からイメージが見えてきたり、たった一つの音の中にたくさんの音をイメージとして聴き出せたりする。ピアノを弾くこと、イメージから音楽を感じること、それらの間には本来、境界線は存在しないはずである。むしろ「イメージの見える」音楽や表現の方が重要なはずである。

そこで「音楽基礎Ｂ（器楽）」「こどもと音楽Ｂ（器楽）」では、題材から音をイメージしながら、イメージについての感性を刺激し、自由な音の表現を楽しむ試みを行っている。その題材として幼児教育で非常に多く活用されている絵本を用い、ピアノでの音遊びを行い、音でイメージを表現することを試みている。これらは感性の開発を目的とし、模範演奏を真似したり、型を覚えたり指の訓練を強いるものではない。この実践を通し、学生各自が音に対するイメージを「耕す」ことを目論んでいる。情操、感性を養うには、自分自身を表現すること「自己表現」が大切である。自然体で伸び伸び音を表現することから始まり、どのような表現にするかを考え、音楽的表現にまで高めるのは、学生自身にある。感性とは、教師が教え込んで育まれるものでもない。教師は学生の表現を「受けとめ」、さらにヒントを提示し、次の表現を促す。これら学生と教師の相互作用と、お互いの即興演奏の発表を通して、音楽に対する感性や音をイメージする力を養うことが、この授業の目的であり指導内容である。工夫した指導点を挙げるなら、表現に音楽性が芽生えてきた時に、これが音楽であるということを認め確認し、学生に自信を持たせること。学生の心に響く、ピアノでのコミュニケーションとセンスが指導者に

も問われる。音楽やピアノ演奏に対してはもちろん、豊かな表現力、感性についての学生の視野の広がりにつながることになれればと考える。

Ⅱ．目的と方法

本研究では「音楽基礎Ｂ（器楽）」「こどもと音楽Ｂ（器楽）」における絵本を使ったピアノの即興表現において、学生がこの実践をどのように捉えたか、即興するためにイメージをどのようにピアノの音で表現したか、ピアノ演奏に対する学生の心情や表現意欲について、学生の記録をまとめ考察する。また、３名の学生をとり挙げ、発表に向けてどのように計画し、自身や他学生の発表から何に気づいたのか、３名以外の学生の発表後の記録も加え、さらにこの実践が保育現場にどのように活かせると考えたのかを合わせて考察する。

Ⅲ．実践の概要

１．対象

平成24～27年度　本学幼児教育科１年次受講生417名

２．科目

音楽基礎Ｂ（器楽）、子どもと音楽Ｂ（器楽）

３．本実践による即興表現について

授業では、学生が各自好きな絵本を選び、読み手に読んでもらいながら、話や絵から受けたイメージを、ピアノで自由に即興表現し、絵本の世界を音で表現させている。即興の一般的な定義としては、「あらかじめ準備することなく、その場で思いのままつくりだすこと」[2]であり、「『生まれてくる』想いを強い緊張をはらんだ精神の注意力でとらえ、受容するのが即興の実態である」[3]とある。本実践での即興表現は、絵本に耳を傾け音のイメージをふくらませ、手のひらでなでるように鍵盤を押す、軽く握ったこぶしでたたく、指先で滑らせるように鍵盤上を左右に動かす等、自由にピアノを打楽器的に用いる表現法を基本としている。これにより、楽譜に書かれた既成の曲にはない音の響きを体験することが可能なこと、学生が難しい技術にとらわれずに、ピアノによる音楽表現をすることを目指している。

「音楽基礎Ｂ（器楽）」では、２回の授業でピアノの即興演奏を体験させている。「こどもと音楽Ｂ（器楽）」でも再度取り上げるが、その間、学生の担当教員も入れ代わりがある。担当教員が代わっても、授業の目的は各教員が互いに確認し合っているので、授業のプロセスは一貫している。その後、全員の発表の場を設定している。

４．学生の記録について

毎授業時の最後に、約10分程度で記録用紙にその時間の授業内容と授業の振り返り、「予習内容」・「練習上の課題点」・「授業を受けての感想」等を記入させている。担当教員はこの授業記録を確認しながら指導に活かすようにしている。また、担当教員が代わった時も学生の状況を正確に把握するための資料となっている。次の項目では、平成27年度の「授業時の振り返りの記録」、「授業レポート」及び平成24～26年度の「即興演奏発表時の計画書」をまとめ、これを基に考察する。

Ⅳ．結果と考察

１．学生の授業記録、レポート課題、試験記録、即興演奏発表時の計画書より、次に示す(1)～(5)の項目に分類して考察する。

(1) 即興表現の捉え方について
(2) ピアノ表現法について
(3) ピアノでの表現意欲について
(4) 即興演奏発表時の学生の計画書より
(5) 保育現場にどのように活かせると捉えているか

(1) 即興表現の捉え方について

絵本の即興表現を実践し即興表現をどのように捉えたか、学生の記録を４つの項目に分類し考察した。

①自由な表現について

＜学生の記録より＞

・自由に発想させる力や、楽譜のない音を作る楽しさが学べると思います。
・即興表現はとても難しく感じるけど、思いっきり自由に表現できるのは魅力だしとても楽しいです。絵本の世界を聞いている人の頭の中で想像してもらえるように表現したいです。
・自分が選んだ絵本に自分が思ったように音をつけていくのは何かとても新鮮で、間違いや正解がないので音をつけていてとても楽しかったです。いつもは曲などを弾いているので、間違いや失敗したなと思うことがあっても即興表現ではそういったことがないので、一段と楽しんで弾けるのではないか感じました。
・表現ってすごいなと思いました。
・表現の幅は本当に広いと思いました。
・偶然他の人と同じ絵本になったが、自分と表現が違っていておもしろいと思った。
・即興とは簡単なものではなかったけれど、遊び心と子ども心があれば、楽しくできるのかなと思いました。

学生のほとんどが、絵本をピアノの音で表現するという試みが初めてである。難しいと感じながらも、初めての即興表現に抵抗なく受け入れることができた学生もいれば、なかなかその発想が難しい学生もいた。難しく考える前に絵本のイメージから音に表現してみることで、音の表現の多様さ、面白さにあらためて気づいている学生もいた。同じ絵本を選んでも、自分とは違う音の表現となったことで、感性の多様さを実感できたと考える。

②感性について
＜学生の記録より＞

・絵を良く見て想像することが大切だと思いました。
・頭で考えてしまい戸惑うことがあったので、感じたままに表現することが大切だと思いました。
・私は絵本を見て上手に弾こう上手く弾こうとしか考えていなかったので表現が同じようになってしまって、面白味のないものにしかなりませんでした。ですが、先生の見本を聞いたり、アドバイスを受けたりして、考えるのではなく感じることが私には足りなかったのかなと思いました。
・感受性がすごく必要だと感じました。
・絵本だけでなく自分の気持ちも表現できるのかなと思いました。

この実践は絵本から受け取る感性、音をイメージする感性、実際身体を動かし表現する感性など、様々な感性が絡み合って表現となる。即興に対する向き合い方、つまり即興演奏において重要な要素である「感受性」、頭で考えずに素直に感じたことを表現しようとすれば出来ることに気付いている学生もいた。感性に素直になること、感じたままに音に出すこと、その出た音を受け入れることが重要である。「絵本だけでなく自分の気持ちも表現できるのかな」という感想にあるように、絵本から始まった感性が自己の内面の表現という道にもつながることになる。つまり演奏者の経験や体験、心のあり方などその人となりが、感性を通して奏者の音楽性となり、音楽でのコミュニケーションが成り立つと考える。

③絵本に音を加えることについて
＜学生の記録より＞

・絵本の世界をより身近にするというのにもとても有効なものだと感じました。
・音をつけると読むだけより場面のイメージが広がり、伝わりやすいと思いました。
・主人公の心の描写や天気の移り変わりなど、そういうものでも表現しやすいことがわかりました。
・雪一つでもいろいろな表現ができるということがわかりました。雪を知っている私たちには表現しやすい本だと思いました。
・音が加わることで悲しさや楽しさが増すので、音って不思議だなと感じた。
・音があると場面が想像しやすくとても楽しく絵本を見ることができて、自分自身即興表現をしていて楽しかったです。音によって明るくなったり悲しくなったりして、音はすごく大事だなと思いました。

絵本の読みきかせに音楽を加えることによる効果を感じ、音楽が加わることで得た表現の広がりに感動もあった。この試みを通し、学生は表現する喜びと共に、絵本の新たな見方も開拓していた。この実践で絵本が助けとなり、音に対するイメージを深め、心の描写や自然の風景を自分の音で表現してみたことで、音楽への感性が刺激されたと言える記述である。また、絵本と音の相乗効果で、さらに絵本が楽しめたと感じていた。絵本からイメージされた音の世界が、時に背景として影として「立体的・空間的」になり、場合によっては音が大きく主張することで、鑑賞する側への刺激もさらに大きくなると考えられる。

④ピアノで即興表現することについて
＜学生の記録より＞

・ピアノに対して見方が変わりました。
・色んな音で表現できて音ってすごいと思いました。
・改めてピアノの楽しさを実感することができたので良かったです。
・初めは本当にどうしたらいいかわからなかった。何度も弾いてみて音と触れ合ううちにイメージがピアノに交換できるようになり、逆にピアノの音からイメージを引き出せたりした。
・ピアノでも色々な音を表現できると知った。音の出し方にもたくさんの方法があり、音の力は凄いと改めて思いました。
・この授業を通して感じたことは、楽譜がなくても絵本の場面に合った曲を演奏できるということです。絵本の場面を自分で理解し音色を選ぶことで楽譜があるかのような演奏ができました。

楽譜を読み取り演奏するのとは違った様々な奏法で演奏できること、絵本の即興表現では、ピアノ演奏を楽譜から解放し、絵本を楽譜に見立て表現することの試みである。指の訓練ができていなくても、特別な作曲技法を学ばなくても、耳を研ぎ澄ませ、音の表情を自分で探求することが可能である。自分のイメージをピアノを使って幅広く表現、演奏することを経験し、心境の変化、ピアノ演奏の概念の広がりも伺われた。自分が感じたままに好きに自由に楽器を鳴らし、楽器に慣れ親しむ一端になれば良いと思われる。この実践が、子どもの歌を演奏する時にも、表情豊かな表現ができる助けになることに期待する。

以上、４つの視点から即興表現をどのように捉えたかを考察した。音がついてない絵本に即興表現をするということは、絵本に耳を澄まし想像を膨らませることであり、イメージを「柔軟な発想力」で新たな音にして表現する力を養うことである。感性を研ぎすまし、絵本に音を乗せ、音のイメージを頭の中で思い描き、表現し合うこのような実践を通し、音とは、イメージとは、表現とは何かということを体験し、「音ってすごいな」「表現ってすごいな」という感想を持ったことは大きな収穫であった。

(2) ピアノ表現法について

学生の記録の中から、表現方法を４つに分類し考察した。

①音の高低を利用した表現法
＜学生の記録より＞

・大きな動物は低い音でゆっくり、小さな動物は高い音で速く。
・全体的に暗いイメージなので低い音を出して怖さを引き出す。
・風は撫でるようなタッチで高い音から下に向かって重ねて弾く。葉っぱがクルクル回るところは高音と中間音を往復する。
・駆け出していくところは高い音に向かって速くしていく。
・喜んでいるところは高い音を使って弾むように、悲しいところは低い音で重く暗い感じに。
・太陽の光が海に反射してキラキラとダイヤモンドのように光り輝くイメージ。ピアノの高い鍵盤を使って表現。
・太陽が昇っていく所は低音から高音に向かって弾いていくことで、昇っていく感じを出す。
・雨がポツポツ降るところは、高音を使ってかわいらしく。
・眠くなるとこはどんどん低く弱くしていった。
・寂しそうなところでは高い音を静かに弾いた。

②音の動き、リズムを利用した表現法
＜学生の記録より＞

・楽しい場面は音をはずませてスキップのようなリズムをつける。
・カエルがピョンピョンのところは、スタッカートで。
・クリスマスの時なので、鈴の音でシャンシャンと鳴り響かせ、雪や冬をイメージして静かな感じも出す。
・楽しいシーンは高い音を使ってはじけるように。悲しいシーンは音一つだけを使ってさみしいように。
・魔法をかける場面はグリッサンドを使って表現するとぴったりだった。
・風が吹くところではダーッと鍵盤を手の甲を使った。
・すやすや眠る場面はゆったりと子守唄のように。

③音量の変化を利用した表現法
＜学生の記録より＞

・これから病気と闘うぞというところでは、読み手と息を合わせて大きな音で力強く。
・勢いある風は力強く大きな音で。
・魚が大きくなるにつれて音も大きくしていく。「そのときです」でバンッと大きい音を出してびっくりさせる。魚が逃げるところは少しずつ遠ざかっていくように小さくしていく。
・蝶々になるまで、だんだん静かな音から最後には一番盛り上がるよう大きな音を出すようなイメージにしてみた。
・忙しい場面では大きな音で慌てているように弾く。びっくりするような場面では大きな音、寝ている場面では家族全員が幸せそうにしているようなイメージを出していく。
・盛り上がるところはダイナミックに弾き、そうでないところはバラバラに弾いたりあえて素朴に弾く。

④その他の表現法
＜学生の記録より＞

・桜の花びらが舞っている部分はさらさらと白鍵と黒鍵に分けて弾いてみる。
・足を絵の具に突っ込んでいる様子は、ペタペタ歩くように黒鍵と白鍵を交互に弾く。
・雨の降り始めは黒鍵を使ってポツポツと。
・暗闇に入りちょっぴり不安。ピアノを半音上げたり下げたりしてミステリアスに。
・盛り上げてから一気に止める。
・ペダルは音に広がりを感じさせることができる機能だとわかった。
・間も大切であるだろうと感じた。

指の訓練の必要がなく簡単に自由に鳴らせるとはいえ、ピアノを使った表現方法の引き出しを学生はまだ多く持っていないので、学生は自分の目指す音色を探す作業に暗中模索していた。初めは戸惑い難しく感じるが、次第にイメージに合ったいろいろな音の出し方があることに気付き、実践の繰り返しにより、初めどうしたら良いか見当もつかなかった即興演奏の方法を次第に習得していく姿が授業の中で見られた。

①について見ると、物質・物体の重量感、空間における高低差、遠近感、質感、気持ちの浮き沈みなど、音の高低を利用している様子がわかる。重いものは低音、遠くになると高音、海に反射した太陽の光は高音というように音のイメージに当てはめている。②は生物やその心の動静、曲線の動きなどを音の並べ方や、音律・リズムで表している。③は動きや状態の変化に伴い音も大きくしていたり、精神的に衝撃を受けたり、覚悟を決めるような場面でも、大きな音を利用しているのがわかる。これらに当てはまらないものを④としていくつか挙げたが、半音の音程で表情をつけたり、黒鍵と白鍵を選り分けて演奏することや、ペダルの効果、音のない「間」の必要を感じている学生もいた。

ピアノという楽器の特性として、いくつかの音を同時に重ねて演奏できること、音域が大変広いことが挙げられる。また、ペダルの活用で音色の変化や音をのばすこと、本体の木枠部分を打楽器的に鳴らしたり、グランドピアノであれば弦の部分に触れたりすることでも音が発生する。音楽の三要素と言われる「リズム」「和音」「旋律」をすべて一人で担うことができるので、楽器の中でも汎用性があり、このことからも保育、学校教育の現場でも多く利用されている。このようなピアノの特性を上手に取り入れることで、あらゆる絵本の描写から各自が想像を膨らませて音で表現していくことが可能となる。

学生も具体的に表現したい音をどのように発音していくか、表情を音でどう表すかは実際に音を探していく中で発見していった。ピアノの広い音域を利用し、音の高さや重なりの使い分け、音量の変化、リズム、タイミング、タッチの変化など工夫していった。例えば、１本指や拳など様々な動きで音を鳴らし、楽譜を用いた演奏では使ったことのない演奏法を利用することで表現方法が様々に広がり、自分のイメージを表現

できることに気付いていった。

物語の中に擬声語が使われているものが、表現しやすいと捉えている学生もいた。「ばたばた」「ざーっ」「ぽきっ」など擬声語にはリズムがあり、言葉として既に音楽的である。魚が逃げていく動きを低音から高音へ音域を広くそして小さくしてみるなど、ピアノで描写する奏法を見付け出しその効果と喜びを感じていた。

ペダルをこの即興表現で初めて使用する学生も多かった。足の操作自体は難しいものではないので、耳と感覚でペダルを踏み即興演奏に取り入れることができると、表現の幅が大きく広がる。ピアノ演奏でのペダル活用の導入にもなるので取り入れることを期待するが、実際、ほとんどの学生が絵本の即興表現でペダルを利用していた。

ここにおける即興演奏でのピアノ表現法とは、機能開発や訓練などを必要としない。絵本を読み受け取った心を、楽器の特徴を利用し、身体の動きと一致させ、鍵盤に触れることを指す。また、出す音が多ければ良いというわけでもなく、「休符」「無音」の時間も表現であり、自分のイメージに相応しい音のバランスが存在する。その気づきから、大胆に表現したい時には勇気を持って大げさに、ほんの１音の響きに確かな意思を持って表現することでどれほど伝わる表現となるかなど、音楽表現がどんどん開拓されていった。これは、楽譜から開放された絵本の即興表現だから味わえた部分もある。また、音楽表現について上記の分類いずれにも言えることであるが、これらすべての表現法は、教師のアドバイスもあるが、学生のこれまでの音や音楽に対する経験から生まれているということである。日常は多様な音に囲まれており、聴覚に問題がなければ意識しなくても何かしら聞こえて過ごしている。そのような日々の積み重ねがあり、絵本の色・形や物語から聴こえてくる音を想像し、音で具現化してみたことで、改めて音楽についての発見や気づきになっていた。このことは次に楽譜を用い演奏する際に、奏法としても、表現としても、音楽性としても、より柔軟性を持って楽譜の見方にも幅が広がるきっかけになると考える。

(3) ピアノでの表現意欲について

＜学生の記録より＞

・改めてピアノの楽しさを実感することができたので良かったです。たくさんの表現の仕方があって楽しかったです。
・絵本で即興をしてみて、今までピアノは楽譜通りだと思っていましたが「どんな風に弾いてもいいよ」と言われてみて、ピアノって自由に弾いていいんだなと思いました。実際に弾いてみるとたくさんの表現の仕方があって楽しかったです。また、先生のアドバイスを聞き、より絵本の表現ができたと思います。
・絵本をピアノで表現すると初めて聞いた時驚きましたが、やってみて楽しかったです。
・絵本の中の表現と同じ様にきれいな音が出るように頑張ります。
・絵本を読むことも、自分の考えていることを音に表すことも少し恥ずかしくてあまり表せなかったです。
・最初はどうしたらいいのかとおどおどしていたが、繰り返していくうちに、本に耳を傾けながら音をつけることができました。
・その場でその時に思ったことを堂々と弾くことができたので、一つの自信にしていきたい。
・表現することの難しさと楽しさを学ぶことができた。今後に生かしていけるようにピアノの授業を頑張る。
・無限に作り出すことのできる音を楽しむことができた。
・ピアノで音を出すことがこんなにも難しいと思っていなかったので、自分の感性をもっと豊かにしなければならないと気づくことができました。
・はじめた頃は表現の仕方が全然わからなくて不安だったが、どんどん練習していくうちにコツがわかってきた。ピアノも即興表現も練習することが大切なことだと気づくことができた。もっともっと練習して自信をつけたい。
・楽譜通り弾かないことが初めてだったので、とても弾いていて不思議な感覚でした。ただでたらめに弾くのではなく、表現の仕方を覚えて力をつけていきたいです。
・ピアノを弾く前に絵本の中に入り込んで自分の思いや感情を音にすることで、自分のピアノと　　の距離感が近くなった。
・本当に人それぞれで、こういう表現もあるのか！と発見が多かった。まだまだ表現力にかけるので、これからも積極的に取り組みたい。
・弾き方により風景や感情を表すことができるのでとても楽しかった。
・演奏の技術をたくさん持っていればすごい演奏が出来そうだなと感じました。

でたらめでは演奏している自分も面白いとは思えない、深く考えれば考えるほど手は止まり、想像を音にすることが難しく感じられ、すんなりとはいかない学生の心情としては苦しく、わけがわからないという状況もある。

即興表現の再現性はないと考えてよい。その場その時の感性で表れるものであり、その点を理解し慣れることでも、少しずつ前向きな意欲も生まれてくるようだ。基本的に、間違いという表現もない。自分で納得できるかどうかが第一である。楽器に向かって行動を起こすこと、そして自分が思ったような音の表現が見つかると、表現することにも少しずつ慣れ、意欲も徐々に増しているように感じる。

「躍動感」や「重さ」を音でどう表現しようか、物語の突拍子も無い展開が面白くて音にしてみるにはどうしたらいいかなど、表現意欲としては絵本に助けられる部分も大きい。そしてもっと表現力を身につけたい、色々な絵本で試してみたい、何か奏法は他にないだろうか、音の重なりはどのくらいがちょうど良いだろうかと研究心も自ずと芽生える。容易な奏法で表現が可能なので、音の表情を自分で探しやすいことも、表現力をもっと身につけたい意欲へとつながっているようだ。

個々の学生の状況を見ながら、教師は学生の表現を受け止め、その中の創造的な部分や工夫している所を指摘し、自分の表現に自信をもたせることでその表現がさらに促される。時に教師が実際に即興の多様な表現方法を例示しながら、より表現活動が活発、積極的になるよう見守りたい。

このように次第にピアノとの距離を縮めながら表現力を身につけ、表現するということが「心の解放」となること、「言葉を使わずに伝える喜び」があること、つまり音楽表現とはどういうことかを学んでいる。少しずつ何か音を出し、自分の殻を破り、自ら表現への道を開拓していっているのである。

素晴らしい絵と言葉で描かれた絵本のメッセージに共感し、自分の音楽を添えていく作業をしながら、聴き手にはどのように伝わるかという配慮も出てくる。自分の表現を伝えるには、自身の枠を取り払っていかなければ伝えきれないと感じた学生もいる。伝えたいと願う気持ちこそが、表現力を養う力となる。感じ、感じたことを音で表現することの重要性に気付いている学生もいる。「即興」にせよ「演奏」にせよ「表現」にせよ、難しくてわからないと思っていた学生も、表現して伝える喜びを味わい、社会においても自信をもって自己表現できるようになることを期待したいと考える。

(4) 即興演奏発表時の学生の計画書より

発表は２分程度、事前に決めた読み手と共に即興表現を一人ずつ行った。絵本の題名、各自が選択した場面、即興演奏（音作り）のイメージ、発表終了後の記録として記述させた。ここでは３名の学生が選択した絵本の特徴などから考えられる即興演奏の仮説を立て、実際はどのように学生が表現したかを学生の計画書から考察する。その他の学生の計画書からも抜粋し、その取り組みについて考察した。

１．平成25年10月11日こどもと音楽Ｂ（器楽）
　　１年次学生Ａ
絵本の題名　　トマトさん
読み手　　１年次学生Ｂ
＜絵本の特徴と内容について＞

この絵本は、畑に落ちている真っ赤に熟れたトマトさんのお話である。大きなトマトさんが主人公なので、視覚的特徴として全編に渡って描かれた赤色が印象深いが、透明水彩絵具の効果で透明感のある色彩である。描画はおそらくＧペンで描かれ、細やかな線画の中にも筆圧によって強弱が感じられる絵となっている。内容はとても暑い夏、ミニトマトは身軽に近くの小川に涼みに行けるが、大きなトマトさんは自分で動けなくて悲しんでいる。そんなトマトさんを、虫やトカゲたちが小川まで転がし、めでたく小川に飛び込み暑さをしのげた展開である。　１）小川に飛び込むまでの苦労　２）やっと転がり落ちることができた小川の水の中の感覚　３）水から上がって涼しく穏やかな気持ちという大きく３つの段落に分けることができる。展開にめりはりがあり、それを即興表現に反映させると面白い。３つの場面それぞれから特徴的な場面だけを取り上げれば、演奏としても収まり良くまとまる。以上を場面選択の仮説とし、次に学生Ａはどのように場面を選択したのかを学生の記述から考察する。

＜各自が選択した場面　学生の記録＞

夏の暑い昼下がり。ミニトマトたちが気持ち良さそうに小川に飛び込んでいく。喜びがあふれ出てくる。トマトさんはうらやましそうにそれを見ている。（元気に飛び込むミニトマトの姿をじっと横目で見る）ひとりぼっちのトマトさん。泳ぎたくても重くて動けないトマトさんは涙を流す。アリやバッタなど、たくさんの動物たちがそんなトマトさんの様子を見て、何とか川に入れてあげようとする。たくさんの動物が集まってきて、「えーい、えーい」と力を合わせてトマトさんを転がす。「ごろごろごろ～ん」とやっと重い体のトマトさんが転がり、川の中に落ちる。「じゃっぷーん！」と大きな水しぶきをあげる。やっと川の中に入れたトマトさん。冷たくて気持ちよいのが表情からも伝わってくる。とても幸せそうな顔のトマトさん。

＜考察＞

学生の記述から、制限時間に合わせ見開き８ページ分の内容に絞り、絵本を抜粋していることがわかる。また冒頭の「喜びが」から「(元気に飛び込むミニトマトの姿をじっと横目で見る)」まで、終わりの「やっと川の中に」から記述の最後までに関しては、学生が絵本から読み取ったイメージ文章が書かれてある。川の中のトマトさんで内容が終わっていることから、学生Ａは絵本の最後の部分・場面選択の仮説３）は選択せずに終えている。トマトさんが小川に転がるまでの場面、たくさんの虫や動物たちがみんなで協力してトマトさんを転がす場面の引用文の量が多く、重点を持ってきている。このことから、学生Ａがこの絵本の中で一番心寄せられている場面が、「皆で協力する場面」であったと考察できる。心引き込まれた場面には、自然と様々なイメージが湧いてくる。「皆で協力する場面」に多くの表現の可能性を感じたのであろう。即興表現はあらゆる絵本、あらゆる場面に可能ではあるが、学生の初めての取り組みとして、自分が心から共感できる絵本を選び出すことも重要となる。その意味で、まず絵本に対しての感受性が問われることにもなってくる。

＜即興演奏（音作り）のイメージ　仮説＞

畑に落ちたトマトさんの話なので、どうしても地べ

たの絵が中心であるが、描かれていなくても夏の空を想像し、学生の選択した場面「夏の暑い昼下がり」に、音としても反映することができる。音のイメージ作りには、絵本全体から想像することで、広がりがもたらされる。また、自分の経験と重ねることでもイメージが膨らみ、表現も助長される。この絵本の場合、日当りの良い畑の匂い、高い青い空や白い雲、小川の流れる音や川辺の草原の景色、蝉や虫の鳴き声など様々考えられる。ジリジリと照らす太陽を、高音の隣り合う音で小さな音量で振るわせる。ミニトマトが飛び込みトマトさんが目指す小川についても表現しておきたい。ペダルを踏みながら親指と小指を交互に動かし小川のせせらぎにする。ミニトマトの身軽さや喜びを左手で高低交互に単音で鳴らす。大きなトマトさんとは対照的な表現をイメージする。落ちて水中に浮遊したミニトマトとして、低音の方は伸ばすリズムにするのも効果的である。時々変則的な音の動きやリズムにすると、表現も単調にならない。

「ひとりぼっちのトマトさん」の場面は、大粒の涙を流すトマトさんの絵が印象的である。涙のしずくがトマトさんの頬を伝い落ちる様を、悲しい気持ちになって表現する。高音から低音へ５本指を１本ずつ使い柔らかく弾いてみる。そんなトマトさんを転がしてあげようとどんどん応援が集まり、大変賑やかなページになっていく。その様子は徐々に音の数や音量を増やす、音域にも少しずつ幅を持たせ表現することで、虫や動物たちが増える様を表現する。ついにトマトさんが川に向かって転がる場面は、劇的な転換の場である。絵本を見るとうつろな表情にも見えるトマトさんであるが、見開きからはみ出る勢いで転がって描かれている。転がる動きを音にするのは握りこぶしをトマトさんだと思って鍵盤の上で転がす、手の甲を滑らせてグリッサンドしても良い。また、ついに念願が叶うトマトさんの心躍る気持ちを音にしても良い。直感を信じ、考える前に心のままに動いてみることで表現できることがある。転がる表現を音で表すのは、多くの場合高音から低音に向けて発音することが一般的な表現かもしれないが、この場面の場合、劇的変化を表現するに当たり、低音から高音に向けて発音することも可能と考える。そしてトマトさんが「じゃっぷーん」と川に飛び込む場面で低音を思い切って鳴らす。ここは、この絵本の盛り上がりの頂点である。絵の描写を見ても、数々の大きな水しぶきに包まれたトマトさんが幸せそうである。水の音も喜びの表情も、音としてダイナミックな表現ができると最高である。水の中で気持ちよくなっている場面のトマトさんは、完全に絵本の枠からはみ出て描かれている。枠にはまりきらない程の喜びを、音での表現も目指す。とにかく激しく表現するのも良いし、対照的にゆったり充実した音色を並べて弾くのも良い。地上では味わえない水中の感覚を、黒鍵を使うことで表現してみても面白い。暑い夏にプールや海に飛び込んだ時のことをイメージしながら、音を探してみるのも良い。以上、絵本の特徴から音作りのイメージし仮説とした。学生Ａのものと比較し考察をする。

＜即興演奏（音作り）のイメージ　学生の記録＞

夏の暑い日、ミニトマトたちがとても元気よく川の中に飛び込んでいく。「ころころ」転がるところ、「ぽっちゃん」と水の中に入っていくところを上手く組み合わせ、躍動感を出す。小川が流れる様子も同時に表現する。ミニトマトのように飛び込めないトマトさんが涙を流す場面では、暗い感じ（悲しい）と、しっとりした（涙をぽとり）のを低音のずーんとした重みのある音と、涙をポロポロを高音でゆっくりポロンポロンと力を抜いて弾く。同時にミニトマトが転がり、水に入っていく様子も表現。（軽快に元気良く水の中に飛び込むミニトマトを想像しながら弾く）

＜考察＞

ミニトマトについて、トマトさんと違った身軽さを音のイメージとして「躍動感」「軽快に元気良く」と捉えてある。小さく軽い物と、大きく重い物を水に落とした時では発生する音も違う。より具体的な音作りの計画の記述はなかったが、ミニトマトが水に飛び込む音として、比較的高音域で音量も大きくなく、また躍動感や軽快さとして、活発に音が並べられたと考えられ、仮説に近い表現計画である。小川を流れる水の音についての具体的記述はなかったが、水辺の情景を音として表現する必要を感じたのであろう。小川もこの絵本の大事な要素である。トマトさんの大きな目から涙の落ちる様子は高音でゆっくり力まず、その暗く悲しい心情を低音で重みのある表現と、非常に具体的な表現法で書かれてある。これは学生Ａがトマトさんに心寄せ、ゆるぎない音のイメージを持った現れで、音のイメージ作りにも影響を与えていると考えられる。また、悲しい心情を重みある低音で、涙とは別に計画しているところが仮説にはない部分であり、素晴らしい感性である。ミニトマトの軽快さと重ねて表現し、対照的な立場や心情の違いにますます拍車のかかる表現になろう。

＜即興演奏（音作り）のイメージ　学生の記録＞

そんなトマトさんを見かねて動物達がみんなで力を合わせてトマトさんを動かそうと頑張る場面では、いろいろな高さの音を次々と入れていき、集まってくる動物たちを表現する。それぞれの（虫や動物）鳴き声をリズムを変えて加えていく。それでも動かないトマトさんの様子は、さらに重厚感を出し、「ずーん」と重い感じの音の大きさと、不協和音で表現する。とかげがさらに加わり、たくさんの動物皆でトマトさんを転がそうとする場面では、「ちゃっちゃっちゃっ」と、とかげの軽い感

じを加えていき、集まってきた動物がたくさんいるのを表現するために、どんどん重みを出していく。そして「えい、えい、えーい」のかけ声と共に、それらが力を合わせる場面では、どんどん音を大きく重くしていき、「えーい」のところをピークになるようにする。「ごろごろ」と転がっていくシーンでは、手の甲を使ってスライドさせるようにスピードをつけ上から下に向かって弾いていく。「じゃっぷ〜ん」と水に飛び込む場面は、トマトの重みを出すために、できるだけ大きな音でがしゃーんと弾く。その時出る水しぶきも、中心から上下に向かって表現する。

＜考察＞

トマトさんを助けようと集まるたくさんの虫や動物を、音域もリズムも様々に数多くの音がイメージされている。たくさんの動物それぞれを、音のヴァリエーションとして配慮している点が素晴らしい感性である。相変わらず動かないトマトさんの状況を不協和音で表現し、うまく行かない残念な感じを表現している。簡単に物事が進まない感じが表れ、残念感が増す表現である。皆の力を合わせてトマトさんが転がるまでを、じわじわと音も大きく登りつめ盛り上げている。転がる場面は高音から低音に向けて鍵盤を滑らせて、大変効果的に表現している。転がる音にスピード感をつけ、水に飛び込む音にも大胆に大きな音でイメージしているところは、音楽的に面白い表現である。転がる場面に関しての計画は仮説の範囲内の様である。飛び込む場面の「がしゃーん」と演奏する計画は、場合によっては破壊的な音になってしまうかもしれないが、そうだとしても幼児は喜ぶかもしれない。

＜即興演奏（音作り）のイメージ　学生の記録＞

やっと水の中に入る事ができたトマトさんの、とても気持ち良さそうな様子は、なるべく明るく、楽しさ、はじける感じを出す。さらにトマトさんが動くたびに出る水のさらさら、ぷくぷくの泡も表現する。（スライドさせていったり、ポロンポロンと軽めに泡の音を入れる）「なんて気持ちいいんだろう」で、ゆったり優しい音を出し、幸せを表現する。

＜考察＞

気持ち良さそうな音は明るく楽しい音をイメージし、幸福感はゆったり優しい音をイメージしている。飛び込んだ後の音としてのイメージは、穏やかに収める感じになっている。仮説とは違って非常に優しさが感じられる。はじける感じというのは、水に浸って瑞々しくなったところから来ているのかもしれない。全体を通して、絵本の細かい部分も音として緻密にイメージされ記述されているのが大変良い。トマトさんの絵本に愛情を感じる表現の計画で、このように絵本を読み込んだ学生が実際どのように発表できたのか、次の発表後の記録から考察する。

＜発表終了後の学生の記録＞

実際やってみると、思うようにテンポ良く即興の表現ができなかった。２人で協力してというのはやはりとても難しいと思った。ページがうまくめくれなかったり、表現したい所で表現したい音を合わせられなかったりするところがあった。練習をしても本番になると思うようにいかないものなので、これからこうした試験や実習を通して、もっと慣れて、誰の前でも自信をもってやれるようになりたいと思った。そして子どもたちの「楽しい！」「もっと聞きたい！」という気持ちを引き出せるような演奏、絵本の読みきかせをしたいと思った。また他の友達のところを見て、読み方（本と音楽の重ね方）や絵本を邪魔しない弾き方というのを客観的に知ることができ、とても勉強になった。ぜひ生かしていきたい。来週からの実習では、今日学んだことを生かして少しでも多くの笑顔を引き出していきたいと思う。

＜考察＞

発表では読みに重ねて演奏するのか、読みの合間に演奏するのか、それがどのくらいの時間の演奏になるのか、大事なポイントだけでも読み手と確認しておくと発表の完成度も上がる。テンポ良く表現できなかったという記述があるが、主な原因として２つ考えられる。１つ目は計画したほどのイメージのような音にならなかった、２つ目は読み手とのテンポ感がうまく合わなかったことである。発表の流れは、発表する側にはもちろん、聴いている側にも印象に関わる大きな要素である。発表では計画通りに演奏できないことも多いが、臨機応変に次の表現の成功を考えることが大事である。他の学生の表現も参考になり、次に活かしたい意欲や、このような即興表現をつけた絵本の読みきかせを保育の現場でも行いたい意欲が書かれてある。時には絵本を音で装飾し、子どもたちの刺激になるような即興表現ができる幼児教育の教員になって欲しいと希望する。

「トマトさん」表紙[4]
絵本からはみ出し誇張して書く事で、より大きな印象を見る側に与える。

トマトさんが転がるページ。
高音から低音に向けて鍵盤を手の甲を滑らせて演奏[5]

２．平成25年10月11日こどもと音楽Ｂ（器楽）
　　１年次学生Ｃ

絵本の題名　ぽたぽたとぷん
読み手　　１年次学生Ｄ
＜絵本の特徴と内容について＞
　この絵本は表紙に「ことばあそびえほん」[6]とあるが、「ぽたぽた」「たらたら」「ちょろちょろ」という水にまつわる擬音語・擬声語で言葉は書かれてある。主人公の女の子自身は一切言葉を発していない。描画は青色を基調とした透明水彩絵具で背景などはにじませ、全体的に淡く描かれている。女の子の動き、環境、状況などから、絵からだけでも音（言葉）が聴こえてくるようで、言葉のない絵本としても十分成立する程である。しかしこの絵本はあえて言葉を添え、肌に水が触れた「感覚」を絵で表現し、それらと言葉を絡み合わせているのが特徴である。
　「すいどう」「うみ」「あめ」に６ページずつ、「かわ」に４ページ、「ふゆのよる」に10ページの全５段落に分かれている。即興表現をするに当たり、どこを選ぶかに大きな差異はない内容と言える。誰もが経験している身近に感じられる場面がほとんどである。学生Ｃはどのように計画したか、次の記述から考察する。
＜各自が選択した場面　学生の記録より＞

主人公元気いっぱいの女の子。お母さんとお父さん、それにお兄ちゃんもいるけど誰もひとこともしゃべらない。ただ聞こえるのは水のたてる様々な音や水のありさまを表す音。水の音だけで表現している。１ページめくるごとに、日常知っている水の体験が出てくる。シンプルに短い言葉で書かれており、自分が知っている水のいろいろな音を思い出させてくれるような、懐かしいそんな場面になっている。

＜考察＞
　絵本の特徴をよく捉えていることがわかる。お話ししない女の子ではあるが、家族設定があることに面白さを感じている。この絵本を読むことで、子どもの頃の感性を振り返り、懐かしく感じている。水に限らず、気がつけば忘れてしまっていた子ども時代の感性を、この絵本によって思い出させてもらったようだ。即興表現に関しては絵本の内容の全部に渡って計画しているのか、抜粋したような文面は見当たらない。
＜即興演奏（音作り）のイメージ　仮説＞
　「すいどう」の場面は、始め「ぽたぽた」から徐々に水量が増していく、蛇口から水が流れる表情を表現していくことが想定できる。最終的に女の子が間違って蛇口に手を当ててしまい、四方八方に水をまき散らしてしまう騒動は、水の勢いをスピード感あるタッチで鍵盤を滑らせていく。慌てる様子も音にする。子どもの頃に水道のハンドルに手が届かなかったり、うまく回せなかったりした事を思い出しイメージする。「うみ」の場面は、浜辺で水を踏む音、水を手で漕ぐ感覚、岩場からお兄さんが飛び込む音そして波の音など、夏休みの海を思い出しながら賑やかに音にする。「かわ」の場面は、川のせせらぎ、滝の流れなど海とはまた違った表現にする。どんぐりの実が「とぷん」川に落ちる音を、ペダルを踏みながら中音域を利用して表現する。「ふゆのよる」の場面は鍋が煮えるなどの室内の様子と、氷ついた屋外や雪が降る情景など、暖かさと寒さ両方の環境が描かれてある。雪の夜は静かなイメージあれば音を静かに漂わせるように静寂を表現するなど、情景を思い描きながら音にする。
＜即興演奏（音作り）のイメージ　学生の記録＞

日常の生活の中で出てくる水の音が擬音語として出てきているので、水がぽたぽたと垂れている時はどんな音だったか、雨がざあざあ降っている時はどんな感じだったか…というように日常生活でそのような音が自分の耳にどう聞こえたのか、思い出しながら音作りをしてみました。ぽたぽた、ぴゅっぴゅっ、ぱしゃん、とぷん、ぽつん…は、はじく感じや音をわざと１つしか弾かないで、その音だけが空間に響くようなイメージ。どぼーん、どうどう、ばっしゃーんは、勢い良く強く激しく何かと何かがぶつかったような、他の場面とは違うイメージで。全体的には優しく、あったかい、日常の生活を思い出させるような音作りをしてみました。

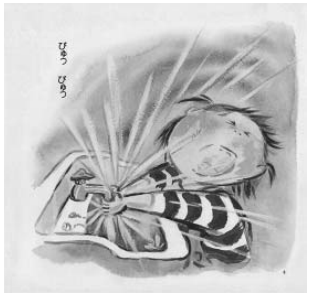
＜考察＞
　学生Ｃは、擬音のリズムに合わせるという安易な音の表現を計画していないことがわかる。まず様々な水の音が自分の耳にどのように聞こえていたかを振り返り、自分の記憶の中に耳をすませて音をイメージしている。そして、はじく感じにしてみようとか、勢い良く強く弾こうなどの表現法を導いている。わざと１音しか弾かないで空間に響かせる表現は、日本の侘び寂びの世界のような音の感性である。このように表現にめりはりをつけながら、しかし非常に繊細にイメージしたことがわかる。絵本自体に物語性がないことや、１ページに一言の擬音だけで作られて大変シンプルなので、即興表現の意図をしっかりくみ、表現の計画ができている。以上、基本的には仮説が支持された内容と言えるが、表現方法はオリジナリティーが感じられる。
＜発表終了後の学生の記録＞

読み手の声とピアノの音のバランスをもっと考えてするべきでした。ピアノの音が大きすぎて読み手の声が聞こえないというのもあったので、読み手はその相手が即興する絵本にも目を通して強弱、抑揚等の表現で２人が合うようにすることが大切だと思いました。緊張はしましたが、取り組めて良かったです。

＜考察＞
　反省点として、読み手とピアノの音量のバランスについて挙げてある。読みに重ねてピアノが盛大な表現をすると、声が聴き手に届かなくなる可能性もある。読み手と上手にアンサンブルできることも発表では重要であり、

打ち合わせをして協働していくことが求められる。即興表現者がどのように読み手に読んでもらいたいか、この絵本は物語性もないので、強弱、抑揚など学生Cの感じた表現の構成を、事前に伝えておかなければならない。それでも発表にはハプニングもつきもので、緊張感の中、計画通りに行かないこともある。この実践による発表は、柔軟な対応力を養うことにもなり、社会に出てからの様々な場面での対応力にもつながると言える。作者・谷川俊太郎が、絵本の巻末にこう述べている。「ことばを耳や眼や皮膚などのからだの感覚を通して覚えてゆくのは、大切なことだと思うんです」[7] この谷川の考えには、聴覚などの身体感覚を通してことばを捉えることへの意義が感じられ、絵本の即興表現が子どもたちのことばの発達に何かしらかの良い影響を与えていくと考えることもできるであろう。

「ぽたぽたとぷん」表紙[8]
主人公の女の子を水の波紋の様な絵で囲み、雫を女の子の鼻に落としている。絵本の題名「ぽたぽたとぷん」の「とぷん」とは、どんぐりの実が川に落ちる音である。



はじく感じや音をわざと1つしか弾かないでその音だけが空間に響くようなイメージのページ[9]

3．平成26年９月30日こどもと音楽Ｂ（器楽）
　　１年次学生Ｅ
絵本題名　風の星
読み手　　１年次学生Ｆ
＜絵本の特徴と内容について＞
　風の目線で、雄大な風景や生き物と遊びながら、地球を自由自在に旅する風景が描かれた絵本である。作者の新宮晋は絵本作家であると同時に、目に見えない「風」の姿を、風で動く「形」にして表現する彫刻家でもある。2000年に１年半かけて風で動く彫刻と共に、地球上もっとも特異な自然空間６カ所を巡り、その後この絵本が出版されている。この絵本の中にも、その時の自然空間が描かれていると思われる。即興演奏が絵本のイメージを「聴こえる音」に変換して表現するのに対し、新宮晋は、目に見えない風を「見える形」に変換して表現する作家ともいえよう。絵はアクリル絵具で、非常に色彩鮮やかに描かれているのが特徴である。風を感じる肌の感覚を想像させながら、空からの視点の絵が広く地球全体を駆け巡ることで、読む側を雄大な気持ちにさせる絵本である。文章は日本語とその英語訳で書かれている。場面選択は制限時間に合わせ、任意に選択可能である。
＜各自が選択した場面　学生の記録＞

題名と１ページ目（①）→風が宇宙できらきらしている。
２ページ目(②)→風があたたかい光のなかで生まれた（登場）。
３ページ目(③)→風が雲のようにふわりととびはじめる。
４ページ目(④)→風が海の上をとぶ。どこまでもあるたくさんの水におどろいている。
５ページ目(⑤)→海を泳ぐイルカたちと水しぶきをあげながらおいかけっこ。
６ページ目(⑥)→上に高く飛び上がったとたんに、ぐるぐるまわって島へと墜落。
７メージ目(⑦)→不思議な木たちの歌声で風は目を覚ます。
８ページ目(⑧)→風はまたはずみをつけて飛び出そうとする。
９ページ目(⑨)→風は船の帆を押すように力一杯ぐいぐい押す。
10ページ目(⑩)→風のことを、海にいた人々がはずんだ声で迎えてくれている。

＜考察＞
　冒頭から10ページまでを選択している。記述内容は絵本の文章を元に、学生Ｅのイメージが綴られている。学生Ｅは空想的なこの絵本の魅力に抵抗感なく引き込まれたようだ。ページを抜粋していないことから、発表の時間制限がなければ、全ページで即興表現が可能だったかもしれないと考えられる。
＜即興演奏（音作り）のイメージ　仮説＞
　この絵本の即興表現は、風の動きを音で表していくことになる。宇宙から星々の間を地球に向かって風が流れる場面は、風が粒子のように描かれてある。ピアノの最高音域を小さな音で無機質にきらめかせる。鳥や虫、蝶々と共に花畑や水草の上を飛んでいる場面は、冒頭より少し音域を下げることで、人間の世界に近づいたような雰囲気を出す。風が雲のようにふわりと飛ぶ場面は、いくつか柔らかく重ねた音を浮かべるように演奏する。海の上を飛ぶ場面、イルカと競争する場面は、広々とした空間をイメージしスピード感を持って駆け抜けるイメージを、単音で音域を広く移動させ活発な動きの表現にする。旋回しながら墜落していく場面は、音を上げては下がるを繰り返し、高音から低音に向かって音量も上げて下降して行く。不思議な木たちが歌う場面は、ミステリアスな雰囲気を不協和音で音量は抑えめに演奏する。弾みをつけて飛び出す場面は、始め付点のリズムで弾ませて活動的に音を鳴らす。ヨットの帆をぐいぐいと

押す場面は、重厚感ある音質で力強さを表現する。最後の夕焼けで赤く染まった浜辺の場面は、ゆったりとしたテンポで穏やかに終える。

＜即興演奏（音作り）のイメージ　学生の記録＞

①宇宙の静けさや風のきらきらした感じを神秘的に。
②やさしくゆっくりと風が生まれてくるイメージで。
③雲のようなふわふわ感と飛びはじめる感じを合わせてだんだん音をあげる。
④海の水とどこまでも続く海を壮大な感じに。
⑤イルカが活発に泳ぐことと水しぶきを表現するために“水がはねる”感じで。
⑥高くとび上がったり、ぐるぐるまわる部分は、だんだん音を変えて、墜落は下がっていくように。
⑦不思議な木たちの声を、少しずつざわざわする感じで。
⑧風に勢いをつけて飛び出そうとするところを少し力強くぐんぐん行く感じで。
⑨海の上で船の帆をぐいぐい押すところは盛り上げる感じで。
⑩岸の近くをイメージしたいので⑨より落ち着いた雰囲気でゆったりと。

＜考察＞

①は宇宙の静けさ、神秘性、風の輝きなどを、高音で静かに弾いたと考えられる。②からは風の動きや風景に合わせて、音の表現にも少しずつ動きを持たせている。流動的な風の流れの中に、泳ぐイルカの水しぶきを「はねる感じ」で表現し、変化を持たせている。⑦を「ざわざわした感じ」と捉えているのも独創的で、次の⑧⑨で力強く盛り上げるなら、⑦では少し控えめな音量の表現を計画したと考える。最後の表現は、絵本を見ると暖かみのあるピンク色の穏やかな海辺に人が描かれており、学生もほっとさせられたのか、ゆったり落ち着いた表現をイメージしている。音作りのイメージを言葉で表現することは難しいが、ページごとに自分が感じたイメージを記述してあり、概ね仮説に近い音作りのイメージが書かれてある。この絵本の求心力がそうさせているようにも考えられる。

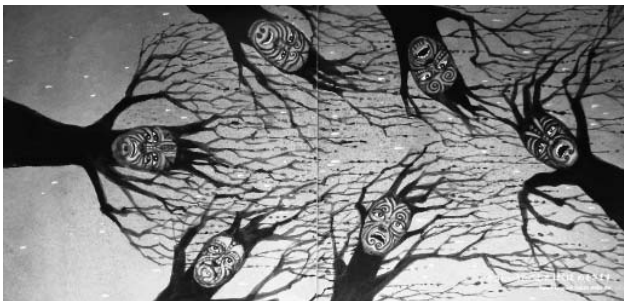
＜発表後の学生の記録＞

なかなか思うように表現できなかったです。もう少し工夫や大胆さがあれば良かったなと思います。そのためには、もっと何度も弾いて、試行錯誤する必要があるなと思いました。絵本の即興は自由な表現でよいけれど、自分でそれをどれほど表現豊かにできるかや、様々なアイデアが必要です。もっと想像力を持って、イメージを表せるようになりたいです。難しかったんですが、やっていて楽しかったので、他の絵本でも挑戦してみたいと思いました。よい経験になりました。

＜考察＞

「何度も弾いて、試行錯誤する必要がある」「表現を豊かに」「アイデアが必要」「想像力を持ってイメージを表せるようになりたい」という気づきがあることから、学生Ｅは絵本に対する感受性を、音に表現し切れなかったと考えられる。＜即興演奏（音作り）のイメージ＞での具体的な音の動きの記述が少なかったことからも、感じたことを音に表していけることに期待する。学生も書いてある通り、何度も音に表してみることも大事であるが、身の回りの音にも耳を傾けること、よく耳を澄ますことが音楽表現の出発点である。

「風の星」表紙[10]
海に漂うヨットの帆のしなり具合から風の力強さが想像される。



不思議な木たちの声を､少しずつざわざわする感じで。
不思議な木たちの歌声で風は目を覚ますページ[11]

４．その他の学生の記録より

・緊張して次がどんな場面だったか忘れてしまう時があったが、上手く対応できたと思う。
・いざみんなの前に行くと考えていたことが真っ白になって、自分の思っていた通りには少し行かなかった。しかし保育者になったら前々から考えることなどほとんどないから、その時その場で自分で考える音を表現しないといけないので、その時にもしっかり考えられるように慣れていきたい。
・人前で恥ずかしさを消して発表するということがなかったので、自由に絵本のイメージの音を出せて良かったし、人前に出ることに少しは慣れることができたし、勉強になった。
・他の人の演奏を聴いてとても勉強になったので、これから様々な絵本を読んで練習したい。読み方にも気をつけたい。
・自分が思いつかない表現の仕方や手の使い方があって、またこういう機会があったら取り入れてみたい。
・友達の演奏を聴いて本の世界に引き込まれていくようだった。
・一人ひとりの感性、個性が見られ、真剣に聴き入ってしまった。友達の演奏を聴いて本の世界に引き込まれていくようだった。

記録からも、緊張を伴う学生が多いことがわかる。何が出るか自分でもわからないという即興独特の緊張もあろうが、自分に対する期待感や表現意欲の裏返しでもあり、発表での緊張自体は悪いものばかりではない。ただ緊張が過ぎると、想定通りにすべてうまく進

むとは限らず、萎縮してしまい練習で何でもなかったことが出来ないこともある。また、いつもと同じように表現していても、普段気がつかなかったことが気になるなど、集中力が散漫となることもある。それらを断ち切ることができずにいると、２分という時間はあっという間で、本当に表現したかったことが出来ずに終わる学生も見受けられる。

発表では皆の前で本読みも体験することになり、絵本を読みきかせる経験にもなっている。絵本の読みにも表情があると面白いであろう。鑑賞している人から笑い声が出ると少し緊張もほぐれ、読みも表現も伸び伸びとでき、そんな読み手に触発され、さらにダイナミックな音の表現にもなれば、人前での発表にも慣れていくことになる。

皆の前で表現を発表することには、勇気もいる。しかし、勇気をもって恥ずかしがらずに発表することで、お互いを知ることができる。心に余裕を持つこと、緊張に負けないで一つ一つ丁寧に行うこと、集中することなど、緊張感を持って発表した経験が、保育者としての将来に役に立つことに期待したい。

個性や感性の違い、様々な技法とその感性にお互い刺激を受け、自分の表現を振り返る。表現することは行動することであり、意思を持つことである。自分の発表で出来た事、出来なかった事を踏まえ、この発表が子どもたちの日頃の小さな表現から、何を訴えているのか気がつく力となれば良いと考える。

(5) 保育現場にどのように活かせると捉えているか
＜学生の記録より＞

・普通の読みきかせとは違って、絵本の場面がとても伝わりやすくイメージが頭の中で広がりました。
・とても難しかったです。その絵本のページを見て思った通り、感じた通りに弾けばいいといわれてもなかなかそれができず、苦労しました。しかし、幼稚園ではそのような技術も大切だと思うのでありのままに、感じるままに弾けるようになりたいです。
・子供たちの表現力も培われると思いました。
・生まれて初めてこのような体験をして、自分の思うままに絵本に音をつけていくのはとても楽しかったです。自分が保育士になった時にこのようなことをしていきたいと思いました。
・みんな場面の音楽が本当にすばらしく、本の世界に入っていくような感覚になった。そして自分はもっと音を出して子供に楽しんでもらえるような楽しさを作っていきたい。
・何気ない毎日をただぼんやり過ごすのではなく、日々変わる音を楽しみながら学び、それを音作りに生かし、子どもたちの想像力を豊かにできるような保育士になりたい。
・初めは難しいと思ったが、段々楽しくなってきた。緊張した面もあったが現場で使ってみたい。
・恥ずかしがらず堂々と行うことができたので、良い部分は伸ばしていき実習でつかえる能力を伸ばしていきたい。
・子どもたちに絵本とピアノ、２つを使って目で絵本を見て、耳でその場面の音から感じてほしいと思いました。ピアノの音が絵本の読み聞かせにプラスされることになって、その場面の雰囲気やどんな状況なのか把握しやすくなるし、より楽しくすることができると思うので、子どもたちも喜んでくれるのではないかと感じました。
・ピアノの即興表現は、ピアノを全く習っていなくても絵や文を見て感じたままに演奏することができるので子どもたちも気軽にピアノに触れ合うことができると思いました。
・絵本に音をつけて読むのはすごく感動しました。動物の登場でリズミカルになったり、どっしりしたり。
・音が入るとイメージしやすいし、ワクワクするなと思いました。
・大変だったけど、より絵本のお話を楽しむことができると思った。どんな絵本でもできるように様々な本でやってみようと思った。

試行錯誤しながら絵本を音のある世界へ繋げることに成功し、表現する楽しさを知り、音楽と絵本が一体化した発表に感動し、子どもたちにも一緒に体験させたい、保育現場でも使える教材にしたいという意欲が見られた。即興表現の難しさを感じながらも、この経験と学びが保育者として役立つ何かがあると気づいている学生や、感情表現にもなることへの気づきから、子どもたちが音を通じ何かしらを表現できるのではないかと感じた学生もいた。絵本の枠から飛び出し、日常のあらゆる状況を音楽で表現できるのではないかと気づいた学生や、音楽が決して特別なものではなく、各自の心の中にあるものとして、日頃から音楽の感性を養い、感性豊かな幼児教育に生かしたいという意欲も見られた。

難しいと感じる一方で、それを幼児教育の現場で利用したいと考えるのは、即興演奏の奥深さを捉えたからであろう。絵本の即興表現は、「見る事」「読む事」「楽器に触れる事」「動くこと」「音を聴く事」それぞれの感性の融合となる。自由な発想で音をイメージし、体を動かしそれらが音になり、出た音をどのように感じ、また次の音に向けてどう繋いでいくか。たくましい想像力は自然と体を動かすことにつながり、姿勢や身体の使い方にも関心が出てくる。感じている心の動きとはどういうことか、そのイメージとはどういうものか、豊かな感性とはどういうことか、それらが何に発展するのかを考えることは、幼児教育の専門性において重要であり、子どもの発達において重要な役割を果たすといえる。

Ⅴ．まとめ

本研究の目的は、絵本を楽譜に見立て、絵本から音をイメージしながら感性を刺激し、自由な音の表現を楽しむことで豊かな音楽表現と感性を養うことにある。学生の記述より、実践から以下の学びや気づきがあったことが明らかになった。

即興表現を通しての成果として、自由に表現することの新鮮さ、表現を尊重される喜び、音楽表現の面白さなどを学生は感じていた。楽譜の演奏では使ったことのない広い音域を利用したり、半音の感覚を楽しんだり、音量に差を持たせるなど、触れ方、動き方次第で表情豊かに表現できることを学び、自分のイメージを音で表現しようとしていた。感じたままに表現することが大事で、絵本に耳を澄ますという初めての経験に、戸惑いながらも挑戦し、音を感じる感性を養っていた。それら音として現れた感性は、自身の内面を表現することへの気づきもあった。即興演奏を発表し、個性や感性の違いに気づき、様々なその感性から刺激を受けることで、自分の表現を振り返る機会となった。

発表では、最後まで「やり遂げる力」、臨機応変の「対応力」、その時どうするのかといった「冷静で客観的な判断力」などがとても重要である。このような体験は、現状をしっかり捉え、「自分で考え実践する力」を養うことにつながると思われる。また即興表現し伝える難しさを感じたことで、幼児教育の場面において、子どもたちの日頃の小さな表現に気づき、受け止め、子どもを理解する視点の広がりにもつながることにも期待したい。

音楽と絵本が一体化した発表に感動し、子どもたちにも一緒に体験させたい、保育現場でも使える教材にしたいという意欲が学生に見られた。そのためには、保育者自身の感性が重要であるということに学生たちは気づいた。絵本の即興表現は、「見る」「読む」「楽器に触れる」「動く」「聴く」それぞれの感性が調和し融合して生まれる。即興表現の体験は、子どもたちや保育者に求める「イメージ」・「感性」について考えるきっかけとなっていると思われる。本研究は学生の記録を基にした考察という分析に止まってしまったが、今後はデータを数値化した客観的な考察も加え進めてみたいと考える。

子どもたちへの読みきかせに音の要素が加わることにより、学生は新たな物語の世界を楽しむことができると考えた。「幼児は絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わい」[12] ながら、「これらの体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」[13] 力を養うことができる。保育者は幼児の持っているイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解し、そのイメージの世界を広げ、十分に楽しむことができるよう素材を用意することが大切である。平成25年に閣議決定された「第３次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」において、幼稚園の役割として「幼児が絵本や物語などに親しむ活動を積極的に行うよう、その指導と充実を促進する」とある。本実践で取り組む「絵本を用いたピアノ即興表現」が、今後幼稚園や保育の現場において、絵本に親しむ新たな活動の一端となればと考える。また、グローバル化を目指す日本社会において、自己表現力は増々重要となるであろう。表現は人間の発達になくてはならないもので、人間性の中心にある。また同時に、近年の時代の変化と共に、学校教育の現場において「主体性」を引き出す授業のあり方がより明確に求められているが、即興表現はまさにそれをすくい上げた内容である。なぜなら音のイメージの感性は、自分の頭の中に「勝手に天から舞い降りてくる」ようなものではなく、各自「主体的に感じ」「考える」ことから生まれて来るものだからである。表現を互いに受け止め主体性を発揮できる場であることで「主体性」が育まれ、「豊かな表現力・感性」が育まれる。幼児教育を担う本学学生にも、その理解と力を身につけて欲しいと考える。

引用文献

１）文部科学省『幼稚園教育要領解説』2008年，p.141
２）相賀徹夫『日本大百科全書』第14巻，小学館，1987年，p.177
３）同上，p.178
４）作・田中清代『トマトさん』福音館書店，2006年
５）同上，pp.18-19
６）文・谷川俊太郎　絵・今井弓子『ぽたぽたとぷん』さ・え・ら書房，1979年
７）同上，p.38
８）同上
９）同上，p.8
10）作・新宮晋『風の星』福音館書店，2004年
11）同上，pp.13-14
12）『幼稚園教育要領＜平成20年告示＞』株式会社フレーベル館，2008年，p.11
13）同上

参考資料

・平成24～26年度「こどもと音楽B（器楽）」における即興演奏発表時の計画書
・平成27年度「音楽基礎B（器楽）」における授業時の振り返りの記録、及び授業レポート

SUMMARY

Tomomi WADA,
Miki YONEZAWA,
Hayuru SATO:

On Piano Improvisation Over Picture Books (1)
— So That the Students Can Develop Their Ability and Sensibility —

We assume that improvisation over picture books is essential for the students of preschool education, and that it is only possible when every sensibility watching, reading, touching the piano, moving the body and listening, is combined in harmony

Forming this hypotheses of ours, we carried out a series of practical research on the students in the classes of "Music Basics B (Instrumental Music)" and "Children and Music B (Instrumental Music)", in Uyo Gakuen College. During this research, we were careful not to instruct the students, but encourage them to find their own image and piano expression.

Consequently most students successfully set their mind free and expressed their image of the picture books with piano sound. We conclude that piano improvisation over picture books helps to stimulate and develop students'musical sensibility and expression, and finally raise their ability as nursery school teachers.

(T.WADA, M.YONEZAWA, H.SATO; Part-time Lecturer, Uyo Gakuen College)